

國學院大學學術情報リポジトリ

外来語と漢語の結合によるサ変複合動詞の形態論的考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北澤, 尚, 中西, 真桜, Kitazawa, Takashi, Nakanishi, Mao メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000624

外来語と漢語の結合による サ変複合動詞の形態論的考察

北澤 尚・中西真桜

1. はじめに

現代日本語の語構成の様相を考えると、和語と漢語だけではなく、外来語の存在も看過し得ない。しかし、外来語に関する膨大な先行研究の中で、外来語が語構成要素（以下「要素」と呼ぶ）として他の語種の要素とどのように結合するかというその内的構造について取り上げた論考は僅かしかない。さらに、外来語要素を含んだ合成語（複合語及び派生語の総称）がサ変複合動詞になるとき、そこにどのような特徴が見いだせるかについて本格的に言及した論考はないと言ってよい。そこで、本稿では、前部要素（以下「前部」と呼ぶ）か後部要素（以下「後部」と呼ぶ）に外来語が含まれる混種語としての合成語の動詞（「サ変複合動詞」の一種）を考察対象にしようと思う。また、その試みは、近年研究が盛んな「動名詞」⁽¹⁾研究や「名詞＋動詞型の複合語」（「N-V型」とも言う）研究にもささやかな一石を投ずることになるにちがいない。

手始めに、外来語を要素とするサ変複合動詞を例示してみよう。「電車通学する」に対して「バス通学する」、「国際化する」に対して「グローバル化する」、「突然死する」に対して「ショック死する」、「拡大印刷する」に対して「縮小コピーする」など、漢語と外来語との生起位置が対応する複合語・派生語が数多く存在する一方で、「プール指導する」「ピストン輸送する」「全クリする（俗語）」などのように、前部と後部の意味上の結合関係が一見しただけでは不明瞭な語も少なくない。

本稿では、このような外来語がサ変複合動詞の要素としてどの位置に生起し、さらに、生起する際に外来語それ自体がどのような音形と意味で使用され、そこで語種の異なる前後の要素とどのような意味関係で結合するのか、多量のデータをコーパスから収集し、類型化を試みることによって、それらの特徴や傾向性を明らかにしようと思う。

2. 研究の枠組みと調査分析の方法

2. 1

そもそも、「外来語と漢語の結合によるサ変複合動詞」とはどのような合成語であろうか。まず、語種に注目し、語種間の結合の諸類型の中に、本稿が対象とする合成語がどのように位置づけられるかを、次の表1によって見ておこう。

表1 合成語（サ変複合動詞に限定）の語種上の結合の類型

前部 \ 後部	和語	漢語	外来語
和語	a. 和語 + 和語	b. 和語 + 漢語	c. 和語 + 外来語
漢語	d. 漢語 + 和語	e. 漢語 + 漢語	f. 漢語 + 外来語
外来語	g. 外来語 + 和語	h. 外来語 + 漢語	i. 外来語 + 外来語

各類型の語例を次に示す。本稿の調査分析の対象は、fとhである⁽²⁾。

- a. 息切れする、風揚げする、稲刈りする、値上げする、命拾いする、など。
- b. 道案内する、持ち物検査する、親孝行する、花嫁修業する、水増し請求する、坂道発進する、繰り上げ返済する、上書き保存する、など。
- c. 右クリックする、投げキッスする、歩きスマホする、など。
- d. 弟子入りする、一般受けする、犯人探しする、挨拶回りする、中年太りする、倍返しする、一気飲みする、二度揚げする、泥棒呼ばわりする、など。
- e. 永久保存する、大量生産する、集団帰国する、公式訪問する、など。
- f. 映画デビューする、在宅ケアする、徹底マークする、再スタートする、など。
- g. タイプ分けする、レジ打ちする、キャンセル待ちする、マニア受けする、ガス抜きする、ブルペン入りする、インスタ映えする、など。
- h. リゾート開発する、ハウス栽培する、アニメ化する、など。
- i. キャリアアップする、イメージダウンする、バトンタッチする、など。

2. 2

次に「外来語と漢語の結合によるサ変複合動詞」をコーパス類によってデータ収集するにあたって、「外来語 + 漢語」（+の記号は結合を意味する。以下同様）と「漢語 + 外来語」の文字列のすべてが「外来語と漢語の結合によるサ変複合動詞」に該当するわけではないことを確認しておく。例えば、「改装オープンする」と「毎日メールする」を比べると、「×改装（ね）オープンする」と「毎日（ね）メールする」のように、前部と後部との間に、前者では間投助詞が介在しづらいが、後者では介在可能である。さらに、「×オープンを改装する」と「メールを

毎日する」のように、前部と後部の語順転換ができるのは「毎日メールする」の方だけである。これは、「改装オープンする」が複合語として結合しているのに対して、「毎日メールする」は表面的には「漢語＋外来語」の文字列であるものの、「毎日」が文節として独立しているからであり、それゆえ、「毎日メールする」の類は、「外来語と漢語の結合によるサ変複合動詞」とは認められないので対象外とする。

「外来語＋漢語」の文字列についても同様である。外来語の助数詞または単位に漢語動詞が付く「2%課税する」「五百億ドル削減する」「80キロ南下する」など、240件を分析対象から除外する。例えば、「今後五年間に五百億ドル削減する」については「五百億ドル」は一語の混種語として独立していることが自明だし、「小松空港より北陸自動車道を車で約80キロ南下する」では「小松空港より北陸自動車道を約80キロ車で南下する」のような語順転換が可能であり一語化していないことが明らかであるからである。

2. 3 データ収集と分析の方法

データの収集にあたっては「現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言（以下「BCCWJ」と呼ぶ）」を用いて、「外来語＋漢語＋する」及び「漢語＋外来語＋する」の語彙を収集し延べ語数及び異なり語数の調査をした。検索方法は、「外来語＋漢語＋する」の場合、キーとなる語種を「漢語」にし、後方1語の書字形出現形を「する」、前方1語の語種を「外来語」として検索した。「漢語＋外来語＋する」を検索する場合は前方1語の語種とキーとなる語種を入れ替える。本稿中には作例の複合語も一部に用いたが、語の適格性の判断については筆者たちの内省に拠った。

なお、本稿では、最初に「外来語＋漢語＋する」を分析する。中村（2018b）を踏まえつつ、漢語を一字要素の類と二字要素の類に分ける。多量に観察できる二字漢語について、前部の外来語と後部の漢語との意味関係に注目しつつ下位分類し、次いで、外来語自体の音形的・意味的特徴によっても下位分類し、いわば二側面からの分析を試みる。後述する「漢語＋外来語＋する」も同様に分析し、その結果を「外来語＋漢語＋する」の結果と比較する。

3. 「外来語＋漢語＋する」の分析

前節の方法を用いて収集し、「外来語＋漢語＋する」のデータとして対象としたのは653件（延べ語数）である⁽³⁾。外来語の直後の要素を「一字漢語」と「二字漢語」に分けて、次にそれぞれの異なり語数と延べ語数を次に示す。括弧内の数値が延べ語数である（本稿では異なり語数を「～語」で数え、延べ語数を「～件」で数えることとする。以下同様）。

・外来語＋一字漢語＋する 124語 (280件)

・外来語＋二字漢語＋する 257語 (373件)

「外来語＋一字漢語＋する」に比べて「外来語＋二字漢語＋する」の方が異なる語数で二倍強の数値があり、両者の造語力に差があることが分かる。

3. 1 「外来語＋一字漢語＋する」

上記のように、本類型は124語 (280件) 見られるが、外来語に後続する要素としての一文字漢語は、「化」「視」「転」「死」「交」「変」の6語だけである。

表2 「外来語＋一字漢語＋する」の一文字漢語

	化	視	転	死	交	変	計
語数	118	2	1	1	1	1	124
件数	265	8	3	2	1	1	280

6語の中でも、「化」だけは「アニメ化する」「イオン化する」「グラフ化する」「グループ化する」「グローバル化する」「システム化する」「デジタル化する」「デフレ化する」「ドラマ化する」「モデル化する」「ワイヤレス化する」など枚挙に暇がないが、その他の接尾辞「視」(「ステレオ視する」「タブー視」する)、「転」(「バック転する)、「死」(「ショック死する」)はほんの数件しか見られなかった。また、「交」「変」は「アド交する」「アド変する」のように、「アドレス交換」「アドレス変更」の短縮語であり、若者言葉あるいは俗語である。

以上のことから、「外来語＋一字漢語＋する」の類は、「化」のみは造語力が高いが、その他の5種類の接尾辞については、「ショック＋死」のように、限られた外来語としか結びつかない。なお、「～化する」だけでなく、「～視する」「～転する」「～死する」「～変する」は、例えば「問題視する」「英雄視する」「回転する」「反転する」、「中毒死する」「事故死する」、「機種変する」などの関連語彙が存在するため、既存の語彙からの類推によって造語されたと考えられる⁽⁴⁾。

3. 2 「外来語＋二字漢語＋する」

「外来語＋漢語＋する」のうち、外来語に後続する要素が二字漢語である類は、257語である。本節では、これらの語を「前部外来語と後部二字漢語の意味関係」と「前部外来語の形態的特徴」という二側面から分類・分析していく。

3. 2. 1 前部外来語と後部二字漢語の意味関係による分類

前部外来語との後部二字漢語の意味関係については、(1) 名詞である外来語と二字漢語の間に格的関係が認められる類、(2) 外来語と二字漢語の間に修飾

関係が認められる類、(3) 外来語と二字漢語の双方が動作性の意味を持ち、時間的前後関係が認められる類、の三タイプに分けることができる。以下、(1)～(3)の順に観察する。

(1) 名詞である外来語と二字漢語の間に格的関係が認められる類

本稿での「格的関係」とは、塚本秀樹(2012)にもとづき、「単一格助詞」即ちガ格、ヲ格、ニ格、デ格、カラ格などの必須格(必須補語)及び任意格(副次補語)だけでなく、「複合格助詞」(トシテ、ニツイテなど)をも視野に入れた、名詞と動詞述語との意味的な結合関係をさす⁽⁵⁾。例えば、「ウイルス退治する」は漢語動詞(漢語による後部要素を便宜上「漢語動詞」と呼ぶことにする)「退治する」がヲ格名詞「ウイルス(を)」と結合した複合語である。同様に、「メール送信する」「テレビ出演する」「アヘン自殺する」なども外来語名詞が格要素であり、これらは「外来語+二字漢語+する」の漢語動詞が、漢語名詞だけでなく外来語名詞にも格的用法を拡張させたと結果であると考えられる⁽⁶⁾。ただし、外来語名詞のすべてが後部の漢語動詞と格的関係で結合しているわけではなく、中には「ピストン輸送する」のように前部と後部との結合を格的関係とは認めたい語も存在する。

そのため、本稿では「外来語+二字漢語+する」の格的関係の判定にあたっては、本稿の筆者の内省だけでなく、次の方法をとる。まず『日本語語彙大系5構文体系』に立項された二字漢語動詞については、例えば「感染する」においては「N1(人、動物)がN2(病気)に感染する：身体変化(状態)」といった構文上の情報を基に、外来語要素が構文上、必須格か任意格かを判別し、あわせて各格別の語数も算出する⁽⁷⁾。その結果、BCCWJの調査では3頁の全257語の「外来語+二字漢語+する」のうち、約8割に当たる206語に格的関係が認められた。そして、下の表3によると、外来語要素の大半が必須格として後部と結合していることが見て取れる。

表3 外来語要素と漢語動詞との格的関係(単一格助詞に限定)

	が	を	に	で	と	計
必須格	10	117	24	7	2	160
任意格	0	3	1	31	1	36
計	10	120	25	38	3	196

以下の①～⑨に、各格ごとに語例を示し、各格の根拠となる『日本語語彙大系5構文体系』の構文型の記述(一部省略)を引用する。該当する格要素(必須格だけであるが)には下線を施した(複合格助詞については⑩⑪として後述する)。

- ①必須格「が」：語例「アトピー悪化する」。「悪化する」の構文は「N1 (抽象) が悪化する：属性変化 (動作)」。「ボーナス確定する」。「確定する」の構文は「(1) N1 (どの語でも入る。*で表記) がN2 (*) に確定する：属性変化 (状態)、(2) N1 (*) がN2 (*) をN3 (*) に確定する：属性変化 (状態)」。
- ②必須格「を」：語例「アカウント取得する」。「取得する」の構文は「N1 (主体) がN2 (*) をN3 (“円”) で取得する：所有的移動 (動作)」。「リスト削除する」。「削除する」の構文は「N1 (主体、機械) がN2 (*) をN3 (主体) から/より削除する：思考動作 (動作)」。
- ③必須格「に」：語例「ウイルス感染する」。「感染する」の構文は「N1 (人、動物) がN2 (病気) に感染する：身体変化 (状態)」。「ルール違反する」。「違反する」の構文は「N1 (主体) がN2 (抽象物) に違反する：思考動作 (動作)」。
- ④必須格「で」：語例「クリアラッカー塗装する」。「塗装する」の構文は「N1 (人) がN2 (施設、場、人工物) をN3 (塗料) で塗装する：属性変化、身体動作 (動作)」。「テレビ放映する」。「放映する」の構文は「N1 (主体) がN2 (抽象) をN3 (通信機器、電気部品、目録) で放映する：精神的移動」。
- ⑤必須格「と」：語例「フリーエージェント宣言する」。「宣言する」の構文は「(1) N1 (主体、命令、論理、情報) がN2 (*) を宣言する：精神的移動 (状態) (2) N1 (主体、命令、論理、情報) がN2 (*) と宣言する：精神的移動 (状態)。他に「プロバイダー契約する」。
- ⑥任意格「を」：語例「サイド交替する」。「交替する」の構文は「N1 (主体) がN2 (主体) と交替する：相対関係 (動作)」。「ボルト接合する」。「接合する」の構文は「(1) N1 (無生物、動物 (部分)) がN2 (無生物、動物 (部分)) と/に接合する：結合動作 (動作) (2) N1 (生物) がN2 (生物) と接合する：結合動作 (動作)」。
- ⑦任意格「に」：語例「ポスト投函する」。「投函する」の構文は「N1 (人) がN2 (手紙) を投函する：身体動作 (動作)」。
- ⑧任意格「で」：語例「アヘン自殺する」。「自殺する」の構文は「N1 (人) が自殺する：身体動作、身体変化 (動作)」。「ドリブル突破する」。「突破する」の構文は「(1) N1 (主体) がN2 (抽象、敵・味方) を突破する：属性変化 (動作) (2) N1 (*) がN2 (数量) を突破する：属性変化 (動作) (3) N1 (人、人工物) がN2 (試験) を突破する：結果 (動作) (4) N1 (主体、乗り物) がN2 (場所、場、具体物) を突破する：身体動作 (動作)」。
- ⑨任意格「と」：語例「アミン中和する」。「中和する」の構文は「N1 (無生物、電気) が中和する：属性変化 (状態)」。

一見して分かるように、必須格ではヲ格 (上記②) が他の格に比べて圧倒的に多い。影山太郎 (1999 : 126) は、「名詞 + 動詞型の複合語」の例として「草むしり、いとまごい、麦踏み、腕くらべ、金儲け、宝探し、虫取り、人殺し」(表1の

aのタイプ)などを挙げつつ、上記のような「動詞由来複合語の例で最も数が多いのは、他動詞に目的語が付いた形である」と指摘する。本稿でも同様の傾向性が見られたわけで、偶然による偏りではないのである。

さらに、影山(同上:127)は自動詞の場合にも言及し、「胸騒ぎ、雨漏り、肩こり、地鳴り、心変わり、胸焼け」などはあるが、「イヌが吠えることを『*イヌ吠え(がする)』とか、子供が遊ぶことを『*子供遊び(がする)』などと言うことはできない」とし、「主体が意図的に行う動作の場合は、自動詞であっても主語の複合化はできない」と論じている。

では、本稿で必須格「が」と判定した語(上記①)はどうだろうか。「アトピー悪化する」「イベント終了する」「エラー続出する」「エンジン始動する」「エンジン停止する」「オークション終了する」「チケット到着する」「ページ一致する」「ボーナス確定する」「ライト点灯する」の10語は、いずれも外来語要素が無生物であり、それらが「意図的に行う動作」を複合動詞が表している語例ではない。つまり、影山の言う「動詞由来複合語で複合化されるのは、内項であって、外項ではない」⁽⁸⁾(同上:129)という主張が「外来語+二字漢語」の語構成においても認められると言える(自他両用動詞も含まれるが、内項であることに変わりはない)。

なお、上記の10語はBCCWJの調査では「Yahoo!知恵袋」か「Yahoo!ブログ」のジャンルで見られる語例である。話し言葉的なジャンルにおける臨時的な結合の例を含むのでないかとの意見は否めないが、その実例がカジュアルな日常語における無助詞化の現象であるとしても、その現象が無意志的な非対格動詞に限られている点は特筆されなければならない。

次に、任意格の分析に移る。任意格の約8割はデ格が占めており、格的関係全てにおいてもヲ格に次いで二位である。そのようにデ格による結合が多いのはデ格の多義的用法の広さにあると考えられる。例えば《方法・手段》の意味で後部と結合する例として、「ネット予約する」(←「ネットという方法を用いて予約する」)、「ミサイル攻撃する」(←「ミサイルという手段により攻撃する」)、《場所》の意味では「ハウス栽培する」(←「ハウスという場所で栽培する」)、《範囲》の意味では「グループリーグ敗退する」(←「グループリーグの中で／において敗退する」)などがある。その他にも「キーワード検索する」、「テレビ観戦する」、「バス通勤する」、「レーザー手術する」、「ストロボ撮影する」、「フラッシュ撮影する」、「タイマー録音する」など多数のデ格の用例が見られる。

なお、「ボランティア活動する」の意味的結合のあり様は、以上のガ格、ヲ格、デ格などの「単一格助詞」では解釈しがたく、むしろ、「複合格助詞」による意味的結合の語例であり、この場合は「として」を補うことで意味関係をとらえることができる。類例として「として」8語と、「アレルギー検査する」のような「について」2語が見られる。全語例を次に示す。

⑩複合格助詞「として」: 語例「ボランティア活動する」「エキストラマン参加す

る」「ゲスト参加する」「ゲスト出演する」「レギュラー出演する」「チェーン展開する」「デモ行進する」「ウインドウ表示する」。

⑪複合格助詞「についての」: 語例「アレルギー検査する」「アース線工事する」。

(2) 外来語と二字漢語の間に修飾関係が認められる類

一般に要素同士の意味上の結合関係は格的関係に限られるものではない。これは文の構成要素に関して考えてみれば自明であり、複合語という、より小さな単位においても事情は同じである。ここでは、格的関係以外の結合の類型として、外来語と二字漢語の間に修飾関係が認められる類を見ていく。なお、本稿での「修飾関係」(正確には「連用修飾・被連用修飾の関係」と呼ぶべきであるが、以下「修飾関係」と略称する)とは前部が修飾し後部が修飾される関係にあることを言う。

なお、本稿ではさらに詳細に分析するために修飾語を下位分類する。その際、より網羅的な分類を心がける目的で、野村雅昭 (1975)・小林英樹 (2004) の四字漢語の語構成の分類を参考にしつつ、「外来語+二字漢語」の修飾関係を分析していく。それが以下の9種類である(下記の各類型の直後に添えた語例は上記両論文からの引用である)。

場所(「空中分解」)、時間(「土曜閉庁」)、期間・頻度(「永久保存」)、様態(「高速回転」)、程度・量(「完全撤退」)、方法・手段(「武力弾圧」)、原因・理由(「薬物中毒」)、目的(「観光旅行」)、評価(「不法投棄」)。

次の表4はその9種の類型に属する語数である。

表4 外来語要素と漢語動詞と修飾関係

場所	時間	期間・頻度	様態	程度・量	方法・手段	原因・理由	目的	評価	計
0	0	0	22	7	10	0	4	0	43

①様態: 語例「シングル活動する」(←「シングルという状態で活動する」)、「ラミネート加工する」(←「ラミネートという様態に／又は、という方法で加工する」)など。

②程度・量: 語例「プチ整形する」(←「プチという程度に整形する」)、「フル回転する」(←「フルという程度の甚だしさで(十分、限度いっぱい)回転する」)、その他に「フル加速する」「フル稼働する」「フル活用する」など。

③方法・手段: 語例「ドリフト走行する」(←「ドリフトという方法で走行する」)、「ランダム表示する」(←「ランダムという方法で表示する」)、「ドライブ旅行する」(←「ドライブという方法で旅行する」)、その他に「デジタル署名する」「デジタル修正する」「デジタル録画する」「シュート回転する」など。

④目的: 語例「バックアップ作業する」(←「バックアップのために作業する」)。

「アタック開始する」(←「アタックのために行動を開始する」)など。

以上、外来語と二字漢語の間に修飾関係が認められる諸々の語を観察したが、全9種類のうち、実際に出現したのは「様態」「程度・量」「方法・手段」「目的」の4種類だけであることが明らかになった。なお、補足すれば、「方法・手段」は格的関係にも近似した用法があるが、上の「ドリフト」「ドライブ」「デジタル」は外来語「名詞」とは認めがたいので、格ではなく修飾語と位置付けたのである。

ところで、BCCWJに見られた実例の中で「ピストン輸送する」は、どのように解釈すればよいのだろうか。もちろん、「ピストンという手段を用いて輸送する」ことではない。むしろ「ピストンのように輸送する」という意味なので、稀少ではあるが、「⑤比況」という新たなタイプが「外来語+二字漢語」には見られることになる。なお、この「⑤比況」は「ピストン運動する」も含めて2語あった。

ちなみに、呉海蓮(2007)の「動詞連用形+動詞連用形」型の複合語の研究における「修飾関係型」の語群を眺めると、上述の全9種類のうち、「場所」、「時間」、「期間・頻度」、「程度・量」、「評価」の語例は見当たらず、むしろ、「様態」(生き埋め・隠し撮り・忍び笑い・添い寝・立ち泳ぎ・散らし書き)、「方法・手段」(貸し売り)、「原因・理由」(焼け太り)、「目的」(覚え書き)ばかりだけでなく「比喩」(投げ売り・殴り書き)も見られ、本節の外来語と二字漢語の修飾関係の種類が生起と近似していることも報告しておく⁽⁹⁾。

(3) 外来語と二字漢語の両者に時間的前後関係が認められる類

前部の外来語と後部の二字漢語のどちらにも動作性の意味があり、二つの動作に時間的な前後関係(同時又は継起)が認められる複合語がある。例えば「リニューアル発売する」は「リニューアルして、それから発売する」の意である。認定の条件をまとめると、(1)前部が必ず動詞であること、(2)前部と後部に対応する主語が同一であること、(3)前部と後部との入れ替えが不可能(動作の順序が前部→後部と決まっている、ただし同時の場合はその限りではない)であること、という(1)～(3)をすべて満たす語がこのタイプに該当すると言える。「コンバート起用する」「ヒット普及する」「リサイクル使用する」「セックス感染する」「アイドリング回転する」など、全6語が該当する。

なお、このタイプは「和語動詞連用形+和語動詞連用形」にも「買い食い」「勝ち逃げ」「切り貼り」「食い逃げ」「建て売り」「汲み置き」(呉海蓮2007の語例)などが見られ、くわえて、四字漢語でも「冷凍保存」「比較検討」「輸入販売」「受注生産」「検査入院」「永住帰国」(小林2004の語例)などがある。したがって、「外来語+二字漢語+する」のみに見られる特徴的な語構成ではないことも言い添えておく。

以上、(1)格的関係、(2)修飾関係、(3)時間的前後関係、に類化して観察してきたが、BCCWJのデータの各類型別の数値を示すと、次の表5の通りで

ある。

表 5 「外来語＋二字漢語＋する」全257語の意味関係

格的関係	修飾関係	時間的前後関係	計
206	45	6	257

「名詞である外来語と二字漢語の間に格的関係が認められる類」が圧倒的に多く、「外来語と二字漢語の間に修飾関係が認められる類」も少なくないが、「外来語と二字漢語の両者に時間的前後関係が認められる類」は僅かであることがわかる。

3. 2. 2 外来語の特徴による分類

前節まで、「外来語＋漢語＋する」の前部と後部の意味関係を「格的関係」「修飾関係」「時間的前後関係」の三種に類型化し、その質的・量的特徴を明らかにしてきた。しかし、実はその分析の途中で「ネット予約する」「ライン入力する」「レンジ解凍する」などの語を通して、他の語種にはない外来語特有の問題に直面したことも事実である。それは、外来語が外国語本来の音形と意味を変容させ日本語の世界に外来語として定着していることに由来する。もとより、「ネット」は「インターネット」の短縮形であるし、「ライン」の意味は本来《線、回線、つながり》であり音声機器用の端子という意味はなかったし、「(電子)レンジ」は和製英語である。そのように、外国語の音形や意味との乖離が特に著しい外来語を本節では特に取り上げ、複合語化する場合の有標 (marked) の外来語要素として注目する (反対に、「通常的外来語」は、無標 (unmarked) であり、外国語本来の音形や意味と近似的な語である)。「有標の外來語」には4種類あり、「短縮形の外來語」、「意味の転用がある外來語」、「外來語＋翻訳語」、「和製英語」である。BCCWJに見られる語数を次の表5に示す。

表 6 「外来語＋漢語＋する」の外來語の特徴による分類と用例数

無標	有標				計
	通常的外來語	短縮形の外來語	意味の転用がある外來語	外來語＋翻訳語	
326	32	14	6	3	381

①短縮形の外來語

外來語要素として短縮形が用いられている類は32語見られる。なお、本稿の「短縮形」とは、原語である外国語に対してではなく、通常使用される外來語の語形に対しての縮約語を指す。したがって、「テレビ」を「テレビジョン」の、「パン

コン」を「パーソナルコンピュータ (一)」の、「アニメ」を「アニメーション」の各短縮形としては本稿では見なしていない。「テレビ」「パソコン」「アニメ」は、日常語として縮約した形が既に定着している語である。ちなみに、BCCWJの検索結果では、「テレビ」が約1万6千件なのに対し「テレビジョン」は約4百件、「パソコン」が約8千8百件なのに対し「パーソナルコンピュータ (一)」は約70件、「アニメ」が約2千7百件なのに対し「アニメーション」は約6百件にすぎないからである。これらの事実から短縮した形の方が非短縮形より言語生活に浸透していることが分かる。

なお、今回のデータにおける外来語の縮約形には、外来語の後半部が縮約される「パス (ワード)」などの型、外来語の前半部が縮約される「(インター) ネット」「(ビニール) ハウス」などの型、外来語 (複合語) の前部と後部の各一部が省略される「コピペ」「メアド」などの型、の3種類あることが確認できた。また、「アース工事する」という語があるが、「アース線 (earth line)」の縮約であることに注意したい。つまり、必ずしも一語の外来語に対して縮約が起きているわけではなく、混種語を縮約した語例もあることに注意したい。

なお、「インターネット接続する」のように、非短縮形も併用されている例もあった。つまり、縮約できる外来語は必ず縮約して使用しなければならないという規則があるわけではないが、どの外来語も縮約以前の形式による複合語よりも、縮約形による複合語の用例数の方が多いことから、外来語要素の縮約が起きることによって直接漢語と結び付きやすくなる傾向性が見いだせる。代表的な語例を次に示す。復元した本来の語形は矢印の右側の括弧内に示した。「コピペ入力する」(←「コピー&ペースト入力する」)、「ネット検索する」(←「インターネット検索する」)、「ネット予約する」(←「インターネット予約する」)、「ハウス栽培する」(←「ビニールハウス栽培する」)、「メアド変更する」(←「メールアドレス変更する」)。

②意味の転用がある外来語

例えば「テレビ出演する」の場合、本来「テレビ」はモノ名詞 (entity noun) であるが、「テレビ出演」の「テレビ」はデキゴト名詞 (event noun) の意味に転用されている。また、「プール」は本来、場所名詞 (locative noun) であるが、「プール指導する」の「プール」も同様にデキゴト名詞の意味に転用されている⁽¹⁰⁾。そのような例を以下に挙げる。

例えば、「ピストン輸送する」では「ピストン」は機械・装置の一種であるが、その動きを隠喩的に転用している。また、「スポーツ走行する」とは一般道ではなく自分の車を持ち込み主にサーキットを走行することを指すが、この場合も「スポーツ」は《競技、運動》から転じて《非日常の競い合い》の意味に転じている。「ボリューム陳列」も「ボリューム」とは本来《かさ、量、音量》の意味であるが、《売り場の一部に同じ商品を大量に陳列する》というこの表現では《大量 (の

品物)》の意味に転用されている。その他に、スポーツでの「コンバート起用する」、スマートフォンの「ホーム設定する」や、オーディオ機器(を備えたPC)の「ライン入力する」、車の運転における「ストール発信する」、プログラミングの「デバッグ実行する」など特定の分野での用語も目立つ。このように、意味が転用され日常生活語彙としてではなく特定の分野でのみ頻用されている語は意味が不透明になり、複合語としての前部と後部の意味関係の復元を難しくすることもある。

③外来語+翻訳語

外国語の語句の前部については外来語にし、後部を漢語で翻訳した類である。「カチオン重合する」「Cationic polymerization」、「ダイヤルアップ接続する」「Dial-up access」、「フォーカス処理する」「Focus processing」、「フォトクロミック反応する」「Photocromic reaction」、「フラッシュ撮影する」「Flash photography」、「ラジカル重合する」「Radical polymerization」の6語である。

化学、電子機器、光学などの分野の専門用語が多く、前部が固有名であるためカタカナ外来語にし、動詞部分を「二字漢語+する」に翻訳して造語されている。一方で、「フラッシュ撮影」のような日常語もあり、それらは、「撮影する」という行為が身近なため、「フラッシュ」との格的関係も理解し易いと考えられる。

なお、この類について補うと、例えば、専門用語の「カチオン重合」は英語「Cationic polymerization」に当たる語であるが、そのままでは動作的意味を持った名詞にすぎないので、実質の意味が希薄である「する」を添えることで動詞としての機能が備わったと考えられる。⁽¹¹⁾

④和製英語

外来語要素の中には、和製英語である「グループリーグ敗退する」の「グループリーグ」、「ストロボ撮影する」の「ストロボ」(もと商標名)、「レンジ解凍する」の「(電子)レンジ」(英語では「microwave (oven)」と言う)、の3語が見られた。和製英語を語構成の観点で見ると、「グループ+リーグ」のように個々の要素としては元来英語に存在するが複合語としては存在しない語と、「ストロボ」「レンジ」のように完璧な和製英語の2種があるが、和製英語であるからといって、後部漢語との意味関係のあり様が特殊であるわけではなく、上記3語ともデ格である。

4. 「漢語+外来語+する」の分析

4. 1 外来語の特徴による分類

前章では「外来語+漢語+する」の分析を行った。本章では前部と後部が入れ替わった「漢語+外来語+する」全95語(異なり語数)を分析対象としていく。データ収集の方法は「外来語+漢語+する」と同じである⁽¹²⁾。

分析の順序が逆であるが、「漢語+外来語+する」についても、外来語要素に

どのような特徴が見られるのか、前節と同じく、「通常の外来語」「短縮形の外来語」「意味の転用がある外来語」「外来語+翻訳語」「和製英語」に5分類して観察する。その結果は意外なことに、「短縮形の外来語」として「自分メンテする」(←「自分で自分をメンテナンスする」)、「全クリする」(←「(ゲームを)全部クリアする」)の2語が見られただけで、有標の他の3種類の用例は皆無であった。なお、「全クリする」では後部外来語だけでなく前部漢語にも縮約が起きており、「外来語+漢語+する」型における「アド交する」「アド変する」と同じタイプである。

このように「漢語+外来語+する」で生起する外来語は、前章の「外来語+漢語+する」とは様相が異なり、ほとんど有標的な特徴はなく、概ね通常の外来語ばかりであった。つまり、特徴のある音形や意味を持つ外来語が、複合語の後部要素となるようなサ変複合動詞の語例は、「全クリする」以外、今回の調査では全くといっていいほど見当たらなかったのである。

4. 2 前部漢語と後部外来語の意味関係による分類

前部漢語と後部外来語の意味関係については、前章の「外来語+漢語+する」と同様に、(1)漢語と外来語との間に格的関係が認められる類、(2)漢語と外来語の間に修飾関係が認められる類、(3)漢語と外来語の双方が動作性の意味を持ち時間的前後関係が認められる類、の三類に分けることができる。

次に表7として各類型の数値を示す。以下、上記の(1)～(3)の順に観察する。

表7 「漢語+外来語+する」全95語の意味関係

格的関係	修飾関係	時間的前後関係	その他	計
48	42	2	3	95

(1) 名詞である漢語と動作を表す外来語の間に格的関係が認められる類

名詞である漢語と動作を表す外来語の間に格的関係が認められる語は、全95語中48語見られた。「外来語+漢語+する」と同様に、各語の格的関係を調査し分類した(必須格と任意格については外来語サ変複合動詞の構文型に関する研究が途上にあるので本稿では区別しない)。その際、「が」「を」「に」などの単一格助詞だけでなく「として」「についての」という複合格助詞も格的関係に含めて、分類すると、次の表8の通りである(以下、格助詞を括弧内に補って語例を示す)。

表 8 漢語要素と「外来語する」の格的関係

格	が	を	に	で	と	として	についての	計
語数	9	15	7	4	0	9	4	48

- ①「が」:「給与(が)ダウンする」、「速度(が)アップする」、「金運(が)アップする」など。
- ②「を」:「自己(を)コントロールする」、「健康(を)サポートする」など。
- ③「に」:「海外(に)シフトする」、「文壇(に)デビューする」など⁽¹³⁾。
- ④「で」:「単品(で)オーダーする」、「追加(で)インストールする」など。
- ⑤「として」:「歌手(として)デビューする」、「作家(として)デビューする」など。
- ⑥「についての」:「導通(についての)チェックする」、「録画(についての)テストする」など。

出現した①～⑥の格的関係は、ト格の用例がないことを除き、「外来語+二字漢語+する」と同じであり、「を」が最多である点も同じである。「が」も概ね「機能」「決勝」「生活」などの無生物主語であり外来語サ変複合動詞が無意志動詞である点も同じである(ただし、「全員クリアする」は例外である)。

(2) 前部漢語と後部外来語の間に修飾関係が認められる類

「漢語+外来語+する」型の語のうち、前部漢語と後部外来語とが修飾関係にあると認められる語は42語あった。「外来語+漢語+する」と同様に、詳細に分析するために修飾語に以下の9種類に類化する。以下、各タイプに該当する語例の一部を挙げる。

表 9 漢語要素と「外来語する」の修飾関係

場所	時間	期間・頻度	様態	程度・量	方法・手段	原因・理由	目的	評価	計
0	1	9	16	15	0	0	1	0	42

- ①時間: 語例「早期リタイアする」
- ②期間・頻度: 語例「再インストールする」「再スタートする」「再チャレンジする」「連続ターンする」など。
- ③様態: 語例「一括ダウンロードする」「自動バックアップする」「電撃アタックする」「本格スタートする」、など
- ④程度・量: 語例「全面リニューアルする」「徹底マークする」「大ヒットする」「猛アピールする」「全クリする」、など。
- ⑤目的: 語例「支援サービスする」(「支援(のために)サービスする」の意)

最初に指摘できるのは、前述の3. 1の「外来語＋一字漢語＋する」に接尾辞「～化」「～視」などが用いられているように、「一字漢語＋外来語＋する」には接尾辞「再～」「大～」「猛～」が用いられていることである⁽¹⁴⁾。

次に、修飾関係の中でも特に「様態」「程度・量」「期間・頻度」の3種が多く他にも「時間」「目的」の項目が出現している。前述の「外来語＋二字漢語＋する」には見られた「方法・手段」が、本節の「二字漢語＋外来語＋する」では見られなかったが、この結果から、「方法・手段」を表す副詞的修飾語が「二字漢語＋外来語＋する」には出現しないという語彙的制限があるとまで言うのは早計であろう。例えば「*手動カットする」は通常は使用されていないが、「手動（という方法で）カットする」は存在してはならないという言語学上の原理や規則はないので、実在しないが、〈可能な語〉⁽¹⁵⁾であると言えるので、以上は特定のコーパスにおける出現実態の報告であることになる。

(3) 外来語と二字漢語の両者に時間的前後関係が認められる類

前部の漢語と外来語のどちらにも動作性の意味があり、二つの動作に時間的な前後関係（同時又は継起）が認められる複合語が2語見られた。「改装オープンする」は「改装（して）オープンする」の意であり、「拡大コピーする」は「拡大（して）コピーする」の意である。認定の条件は27頁の(3)と同じである⁽¹⁶⁾。

5. まとめ

本稿では、まず、合成語内の外来語が生起する位置に注目し、「外来語＋漢語＋する」と「漢語＋外来語＋する」という二種の合成語（サ変複合動詞）を観察することにした。

次に、両者にはいずれも派生語と複合語の二類型があり、前者の漢語接尾辞には「化」「視」などがあり、後者の漢語接頭辞には「再」「大」「猛」が存在し、一定の造語力があることがわかった。

しかし、両者の主要な形態は、使用頻度から見ても、「外来語＋二字漢語＋する」と「二字漢語＋外来語＋する」である。両形態とも前部と後部との意味上の結合関係は〈格的関係〉〈修飾関係〉〈動作の時間的前後関係〉に三分類することができる。BCCWJを用いた量的な調査では、「外来語＋二字漢語＋する」では圧倒的に〈格的関係〉による結合のタイプが多かったが、「二字漢語＋外来語＋する」では〈格的関係〉と〈修飾関係〉の数値が拮抗していた。この傾向性の違いが、後部における漢語と外来語との文体的特性の違いによるものなのかどうかはさらに検討を要する。さらに、詳細に見ると〈格的関係〉の中でもヲ格とガ格の前部だけで、全体の5～6割を占めることが明らかになった。これは「動詞由来複合語の例で最も数が多いのは、他動詞に目的語が付いた形である」及び「動詞由来

複合語で複合化されるのは、内項であって、外項ではない」という影山太郎氏の主張と合致する調査結果である。〈修飾関係〉では様態、程度・量を表す前部が特に多く、それらを「副詞的修飾要素」と呼ぶこともできるかもしれない。それに対し、(動作の時間的前後関係)の語例は稀少であった。

さらに、外来語そのものの音形と意味に注目すると、「漢語+外来語+する」では、有標的な語例は「全クリする」「自分メンテする」以外に見当たらず、ほぼすべて無標の通常的外来語であった。それに対して、「外来語+漢語+する」全381語のうち、「短縮形の外来語」32語、「意味の転用がある外来語」14語、「外来語+翻訳語」6語、「和製英語」3語が見られた。特に「プール指導する」の「プール」などに見られる意味の転用の分析には、今後、認知意味論的な観点も必要になろう。以上が本稿の考察の概要である。

言うまでもなく、「外来語+漢語+する」も「漢語+外来語+する」も混種語(hybrid words)であるが、現代語における混種語動詞についての語形成の原理に関する論考を寡聞にして知らない。外来語サ変動詞と漢語サ変動詞の文法的機能の共通点と相違点の議論も端緒に就いたばかりである。本稿の観察と報告によって、その幾許かを明らかにしたものの、その他の語種によって結合するサ変複合動詞の類の、その全容をも見据えた上での説明原理や普遍的な規則の析出にまでは至っていない。そのために必要な、特に和語とそれ以外の語種との結合によるサ変複合動詞類の考察については別稿を期したい。

注

- (1) 「動名詞」とは、影山太郎(1993)によると「verbal noun」のことで、「『する』を伴い動詞化する表現」(26頁)であり、「散歩、研究、徹夜」などの漢語の他、「立ち読み、夜遊び、買物」などの和語や「テスト、カット」などの洋語も含まれる。(26頁)と述べている。
- (2) aについては阿部志野歩(2011)、eについては小林英樹(2004)の成果がある。なお、中村幸弘(2018b)はサ変動詞「する」の包括的で精緻な記述を行っている。同上書78~79頁では、サ変動詞「する」の複合動詞を次の16分類している(引用にあたり語例と説明の一部を省略、例えば「涙する：和語名詞。」は「涙する：和語名詞に「する」が付いたもの」の意味)。
 ①恋する：和語動詞連用形。②涙する：和語名詞。③値上げする：和語名詞に動詞連用形がついた複合名詞。④お参りする：丁寧の意の接頭語「お」を冠した和語名詞。
 ⑤くよくよする：疊語型のオノマトベ。⑥がっかりする：⑤以外のオノマトベ。⑦ジャンプする：カタカナ外来語。⑧変化する：二字漢語。⑨具体化する：三字漢語。⑩自画自賛する：四字漢語。⑪略する/託する：一字漢字や一字漢語。⑫察する：一字漢字。各漢字の末尾音「つ」が撥音化されている。⑬信ずる：一字漢字。各漢字の末尾音が撥音であるところから「する」のサ行音部分が濁音化している。⑭命ずる：一字漢字。各漢字の末尾音が母音「う」「い」であるからか、「する」のサ行音部分が濁音化している。⑮重んずる：ク活用形容詞語幹が接尾語「み」を伴ったもの。その「み」が撥音化したところから、「する」のサ行音部分が濁音化している。⑯先んずる：名詞が格助詞「に」を伴ったもの。その「に」が撥音化したところから、「する」のサ行音部分が濁音化している。以上の分類を示し、特に⑤~⑨には「該当語が大量にあります」と指摘している。本稿が対象とする「リ

- ゾート開発する」「デジタル化する」「大ヒットする」などの類型には直接言及がないが、⑦～⑩の「サ変複合動詞」と関わりを持つ。
- (3) 上記の検索条件でヒットした総数は、誤字（漢数字の「二」とカタカナの「ニ」の入力ミス）、固有名詞（「からくりテレビ録画する」）、「～or～する」は除外してある。
 - (4) 「アド交する」に関連して「援交」があるが、その「交」は「交際」である。
 - (5) 『日本語表現・文型事典』（朝倉書店2002年刊）も、「複合格助詞」を格と見なす旨の記述が見られる。ただし、複合格助詞については、必須格／任意格の区別ができず、表3には立項していない。
 - (6) 詳しくは、小林英樹（2004）「4. 四字漢語動名詞」を参照。
 - (7) 『日本語語彙大系 5 構文体系』に立項されていない漢語動詞にも前部との格関係が認められるが、必須格か任意格かの判定ができないため、本節では対象外とした。例えば「インターネット公募する」はおそらく「インターネット（で）公募する」であろうが除外してある。そのような語例が「ケーキ入刀する」「スプレー噴霧する」「ビザ発給する」など全15語あった。
 - (8) 「内項」「外項」は「非対格性の仮説」に基づく。他動詞の主語を「外項」、目的語を「内項」とすると、自動詞を二分類することができる。「服が汚れる」は内項を持つ「非対格動詞」であり、「弟が遊ぶ」は外項を持つ「非能格動詞」である。
 - (9) ただし、呉（2007）の調査は『学研国語大辞典』（1978）の見出し語に拠っており、語群の中には古語も混在する。ここに挙例した語は、本稿独自の再調査による『岩波国語辞典 第八版』にも立項された語である。
 - (10) 影山太郎編（2011）を参照。
 - (11) よって、「フラッシュ撮影する」1語以外の「③外来語＋翻訳語」5語と、比喩的用法が明らかな「ピストン輸送する」「ピストン運動する」2語及び動作の時間的前後関係を表す「コンバート起用する」の1語を除いた、「②意味の転用がある外来語」9語については、特定の領域の専門用語であり、語の解釈が恣意的にならないよう、前節の意味関係の分析対象から外してある。
 - (12) 「もう一度スタートする」「～等々チェックする」のように、本稿の「漢語＋外来語＋する」の範囲から逸脱する語例は除外してある。また、「写真UPする」「最近Hする」など、アルファベット表記の語例も除外した。また、「二、三百ポンドする」「二千万ドルする」などは、一見すると「漢語＋外来語＋する」であるが、「9000ルピアする」のような算用数字の表記もあることから対象外とする。ただし、「金額＋通貨単位＋する」の「する」が《値段である、金額がかかる》の意味であることは興味深い。
 - (13) 「高校デビューする」という語は「芸能界デビューする」「文壇デビューする」と同じくニ格として解釈する。「高校デビュー」の意味が特殊化されるのは、例えば「朝帰り」が「遊んで朝に帰る」の意味であるように、他の複合語にも見られる現象である。また、「高校にデビューする」という奇異なコロケーションには、意味上無理がありイレギュラーな造語である印象があるため、若者言葉（俗語）として主に使用されている。窪国晴夫（2002）を参照。
 - (14) 漢語接頭辞の「再」が9語（27件）、「大」が2語（9件）、「猛」が1語（1件）見られた。
 - (15) 用例調査によって〈実在する語〉と〈実在しない語〉を区別することができるが、後者はさらに、実在しないが〈可能な語〉と、実在せず原理的にも〈不可能な語〉に区分することができるという影山太郎（1993：9～10頁）の説による。
 - (16) 表7の「その他」の3語は、「胃カメラする」（胃カメラで検査する）、「直リンクする」（直接ホームページなどにリンクを貼る）、「放置プレイする」（おもに人をそのまま放置してお

く)である。これらの「カメラ」「リンク」は名詞であり、「プレイ」も動詞なのか又は《遊び・活動》の意味の名詞なのか、定かでなく外来語として完全に動詞化していない点では共通する。

参考文献

- 阿部志野歩 (2013) 「名詞+動詞連用形+する」型動詞と「名詞+動詞」型動詞の語構成と自他」『学芸国語国文学』45
- 池原悟・宮崎正弘・白井諭・横尾昭男・中岩浩巳・小倉健太郎・大山芳史・林良彦編 (1997) 『日本語彙大系 5 構文体系』岩波書店
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版
- 影山太郎編 (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 影山太郎編 (2011) 『日英対照 名詞の意味と構文』大修館書店
- 北澤 尚 (2012) 「現代日本語の外来語の品詞性について」『学芸国語国文学』44
- 北澤 尚・王潘琳 (印刷中) 「現代日本語の外来語サ変動詞のヴォイスについての記述的研究」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系』第72集
- 窪園晴夫 (2002) 『新語はこうして作られる』岩波書店
- 呉 海蓮 (2007) 『複合語の語構成に関する研究』國學院大學大学院研究叢書文学研究科18
- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 陣内正敏・田中牧郎・相澤正夫編 (2012) 『外来語研究の新展開』おうふう
- 田川拓海 (2018) 「外来語動名詞の形態統語研究に向けて—範疇、語種、形態構造—」『文藝言語研究』74
- 塚本秀樹 (2012) 「第6章 日本語における複合格助詞」『形態論と統語論の相互作用』ひつじ書房
- 中村幸弘 (2018a) 「非動作性二字漢語／訓なし一字漢字／カタカナ外来語略語形+接尾辞「化」サ変複合動詞の時代—連体修飾語としての「欲望する」「塑する」「キャラ化する」—」『國學院雑誌』11月号
- 中村幸弘 (2018b) 『先生のための“する”という動詞のQ&A103』右文書院
- 野村雅昭 (1975) 「四字漢語の構造」『電子計算機による国語研究 VII』国立国語研究所報告56 秀英出版
- 茂木俊伸 (2012) 「文法的視点からみた外来語—外来語の品詞性とコロケーション—」陣内正敏ほか編 (2012) 所収